

## 天正遣欧少年使節団が持ち帰った〈グーテンベルグ印刷機〉

戦国時代末期の天正10年（1582年）日本におけるキリスト教の布教を目的に、九州のキリシタン大名、大友宗麟・大村純忠・有馬晴信の<sup>みょうだい</sup>名代として天正遣欧少年使節団がローマへ派遣された。

伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルティノ等12～14歳の4名の少年を中心とした使節団である。

1590年（天正18年）使節団によって持ち帰ったグーテンベルグ式金属活字印刷機は加津佐に置かれていたがイエズス会の潜伏や教育機関の隠匿が豊臣秀吉に発覚する恐れがあり、翌年、天草コレジヨへ移された。

コレジヨは宣教師養成を目的とした大神学校で、当初豊後の府内（大分市）に開設され、各地のセミナリオ（小神学校）、ノビシアド（修練所）の上に立つ最高学府である。

1591年から7年間、日本最初の活版印刷による教材や辞書など、47種がグーテンベルグ印刷機を使って印刷された。天草本と呼ばれる「伊曾保物語」「平家物語」「羅葡日辞典」など12種類が現存する。

1611年になると徳川幕府はキリシタンの布教を一層厳しく禁じ、グーテンベルグ印刷機による天草での出版はおよそ1612年までに停止された。

1614年に、徳川家康が大追放令を発令したため、イエズス会本部やグーテンベルグ印刷機、そして印刷技術者までもがマカオに追放され、これで天正末期の1591年から20余年にわたったキリシタン版の印刷事業は完全に途絶えたのである。



復元されたグーテンベルグ印刷機（天草コレジヨ館）